令和７年度　旭川市工芸センター運営委員会　会議録

日　　時　　令和７年８月１９日（火）　午後２時から午後３時３０分まで
場　　所　　旭川市工芸センター会議室（オンライン併用）
出 席 者　　（委　員）藤田委員長、河野委員、宮島委員、滝野沢委員、笹川委員、
　　小泉委員、中村委員
　　（事務局）工芸センター　内田所長、稲垣副所長、小関副所長、青木主査、高橋主任
会議の公開・非公開の別　公開
傍 聴 者　　なし

会議資料　　次第
　　委員名簿
　　資料１　令和６年度事業報告書
　　資料２　工芸ニュース vol.88
　　資料３　工芸センター利用実績の推移
　　資料４　令和７年度の事業概要

１　開　会

２　議　事

（１）令和６年度事業の報告

・事務局より、資料１、２、３に沿って令和６年度事業内容を報告

（委員より）

機械貸出や試験実施について、より多くの事業者に利用していただけるよう、広く周知を図るとよいと思います。機械の用途や、年式、写真、料金などの情報を一覧にして、ホームページに掲載するとわかりやすいと思います。

（２）令和７年度事業概要について

・事務局より、資料４に沿って令和７年度事業概要を説明

（委員より）

自治体間連携の推進について、ぜひ積極的に進めていってほしいと思います。旭川家具工業協同組合には、旭川市内のほか、東川町、東神楽町、当麻町内の事業者も加入しているので、これらの町とは特に連携を強化してほしいと感じます。

（３）意見・情報交換

・各委員より、工芸センターへの要望や、各業界の動向などを情報交換

（委員より）

建具業界は、新規住宅着工件数の減少や資材価格の高騰などを受け、たいへん厳しい状況です。

建具だけでやっていくのは厳しいので、家具や部材製造なども行う業者が増えてきています。職人の減少なども加わって、さらに厳しい状況が続いていますが、なんとか乗り越えていけるよう、業界で連携しながら一丸となって頑張っているところです。

工芸センターでの機械貸出について、これまでに使ったことのない機械を使えるようになると、従前は断っていた仕事も請け負えるようになるので、例えば建具事業協同組合で工芸センターを訪問し、機械操作を教わるといったことも考えてみたいと思います。

（委員より）

木材協会は、大まかに分けて針葉樹と広葉樹の２つのグループで活動しています。

針葉樹については、新規住宅着工件数の落ち込みに加え、建築基準法改正や旭川市内の審査機関の減少により建築確認申請に時間を要するようになったことなどによって、厳しい状況が続いています。そのような中で昨年からは、木造非住宅物件のニーズを把握するために、北海道木材産業協同組合連合会が中心となって、道内の全市町村を訪問して道産木材ＰＲキャラバンなども行っています。

広葉樹については、家具材と樽材としての利用が中心です。

家具材に関しては、一昨年に家具組合や工芸センターなどとともに新樹種の利用に向けた研究を行いましたが、一定の成果が出たと思います。

樽材に関しては、全国から多くの需要を受けて値上がりしており、今後も高値が続きそうです。

（委員より）

陶芸業界では、高齢化と人材不足が大きな課題です。

ただ、数年前から陶芸フェスティバルの出展者の中に若い方が目立つようになり、陶芸協会にも若い作家が加入するなど、世代交代が進んでいるようにも感じます。若い方たちはＳＮＳなどをうまく活用しながら活動しており、私たちも頑張らなければと思います。

こうした若い方たちに技術を継承していくことの必要性を強く感じています。簡単なことではありませんが、今後の旭川の陶芸業界のためにも頑張っていかなければと思っています。

やきもの協会としては、新たな試みとして、12 月にイオン駅前店での展示販売会なども計画しています。

（委員より）

工芸センターは創立 70 周年を迎えたとのことですが、時代の流れとともに様々なことが大きく変化していく中で、我々は何をしていくべきなのかを考えるということが、日本全体として大きな命題になっていると感じます。

近年は、家具業界に限らず、若年者の離職率の高さが問題となっています。昔のように、若くて元気で意欲があって、多少きつくても耐える人間が無数にいるという状況からは様変わりしている今、私たち教育機関としては何をすべきなのか、模索しているところです。

東海大学の取組としては、旭川キャンパスが閉校した後も、札幌キャンパスの学生たちをチャーターバスで旭川へ連れていき、関係業界を見学・紹介する機会などを設けています。興味を示す学生が一定数おり、旭川の家具業界に就職する学生もいるような状況です。

旭川市と音威子府村との間で連携協定を締結したとのことですが、東海大学でも、音威子府工芸高校との間で 20 年以上に渡り連携事業を続けています。おと高に出向いて講義をしたり、おと高から生徒を招いてワークショップなどを行っていますが、生徒たちは高いモチベーションを持ってものづくりを学んでいると感じます。彼らが家具業界などで力を発揮していけるよう、それを受け止める企業がさらに増えていくことが望まれます。

今回の自治体間の協定締結を機に、ネットワークがさらに広がり、面白いことにつながっていけばいいなと思います。

（委員より）

中学校の技術科教員の養成に携わっています。

現在の技術科は、伝統的なものづくりとデジタル技術の融合が大きなテーマとなっています。

技術科教育の大きな問題として、技術科教員の免許を持っている教師が少ないことが挙げられます。北海道は特に少ない状況です。そのような中で、他教科の教師が働きながら技術科教員免許を取得するための講習などが、国や道により予算化されて進められています。ここ数年で改善が進むのではないかと思います。

また、次回の学習指導要領の改訂では、技術科の時数が大きく増える見込みとされているなど、追い風を感じています。

教育の世界では、幼少期の原体験が、その後の知的好奇心に大きな影響を与えるといわれています。日本では中学校での技術科が唯一の技術科教育ですが、先進国の中には幼稚園年中から高校３年まで技術科教育を行っている国もあるなど、日本とは大きな差があります。

旭川には、ものづくりに触れる環境が整っているので、幼少期の子どもたちが工芸などの技術に触れる機会が増えると、その後の職業の選択肢が大きく変わってくるのではないかと思います。

（委員より）

インテリアコーディネーター協会は、高齢化が進み退会者も多く、活動が停滞しています。協会に所属せずに活動する方が増えており、協会として今後の方向性について模索しているところです。

また最近では、商業施設などのインテリア設計を、コーディネーターに依頼せず、資格を持たない方に頼んでコストを抑えるケースが増えてきているようにも感じます。

実際のコーディネートに当たっては、工務店よりも施主の意向を尊重するよう心がけています。また、コーディネーターとしての個性は必要ですが、過剰な個性は嫌がられるなど、難しい面があります。

幼少期からものづくりに触れ合うことの大切さについてですが、私の家は建築関連で、職人も一緒に寝泊まりする中で育ちました。職人と触れ合い、興味を持つことができるような環境が必要だと実感しています。

（委員より）

旭川家具工業協同組合は、今年で創設 76 年を迎えました。

４年前には、家具を核にした産業観光施設として、旭川デザインセンターをリニューアルしました。家具を買うだけでなく、旭川のデザインと歴史を学び、ものづくり体験などもできる施設となりました。リニューアル後の年間来館者数は２万人から３万人へ増え、今年は４万人を見込んでいます。

家具業界としては、コロナ禍以降、住宅着工件数の落ち込みなどにより、高級で質の高い家具の需要は厳しい状況にありますが、高品質でデザインも優れた旭川家具として、海外も含めた販路拡大に力を入れているところです。また、技能五輪国際大会への連続出場など、技術力の強化についても取り組んでいます。

今後も引き続き、運営委員会の場を通じて、業界を越えた情報交換や、今までにないつながりができればよいと感じています。

３　閉　会